

龍介の様子がおかしいことに気づいたのはここ最近だった。

いつも考え事をしており話しかけてもたまに返事が上の空で、そういうこともあるだろうと放っておいたのだが、今では課の連中も気づいて密かに噂するくらいになっていた。習慣だった朝食も一緒に摂ることがなくなり、夕飯はここ二週間共にしておらず、三日に一度は俺の家へ転がり込んで来ていたのも、まったくなくなった。避けられているのかと言えどそうではなく、俺をまるで見ていないという方が近い。心が嫌な感じにざわつくが、龍介を質するという気は起きず、俺は例によって惰性のまま毎日を消化していた。未だ蒸し暑い九月末の東京で、何事に対しても傍観者のような自分を、俺は良いとも悪いとも思わなかった。

「今日はリラクゼーションです。私の指を見つめてください」

神崎律子は、龍介の目の前に人差し指をかざした。

「日々捜査に追われて、あなたは疲れきっているのよ。今この二十分、わたしと一緒にいる間は何もかも忘れてしまっ
ていいの」

龍介は律子の人差し指よりも、その瞳を凝視していた。

最近眠れないことが多いと話した龍介に、それなら俺の一期上の開業医がいるから紹介してやると武郎が言った。

眠れないのは、ひとつには今抱えている懸案のこと、ひとつにはやはり、誠吾のことだった。ひとつたび自分の底に沸き上がる激情に身を委ねてしまえば、それは同時に誠吾との二十二年の清廉な関係に終止符を打つことを意味する。それを判つていながら誠吾を欲し、いたたまれなくなり、また感情に蓋をするという悪循環だった。簡単なリラクセスの方法と、軽い睡眠導入剤さえ手に入ればいい、そうして武郎の勧めで訪れたクリニックだった。

「何が」俺は極力平静を装った。

「最近ろくに口も利いていないみたいですけど」

「きみに何の関係がある」

「あるんですよ」と涼香は背筋を伸ばした。

何を言いつ出すんだこいつは。

「昨日銀座通りで、二階堂さんが、ものすごいブス・・・失礼」そこで涼香がコホンと咳払いをして「その、あんまり綺麗ではない女性と一緒に歩いていたのを見かけたから」

「で？」

「で？・・・って」

「何が知りたい」

「わたしは、朝倉さんと二階堂さんは」

「友人だよ」

胸の奥がズキンと痛んだ。

「二階堂が誰とどこを歩こうが勝手だ」

涼香はあつげにとられた表情をしていた。丸く開いた口から、綺麗な歯並びが覗いている。

「そんな綺麗な顔をしてよくもしれっとウソがつけるものだよ」

「はあ？」

「二階堂さん、何だか様子がおかしかった」

俺の目に僅かな表情が走ったのだろう。目の前の機動隊員は結構鋭い。

「そのブ・・・綺麗なじゃない女性が二階堂さんの腕を取って引つ張るようにしていて、二階堂さんは何だか上の空な感じでそれに引きずられるように歩いてた」

「二階堂はそのブ・・・綺麗じゃない女性と歩いているときに、きみには気づいたのか」
 「もう、ブスでいいのよ！ まったくわたしは腹が立っているんだわ！」

いきなり怒り出すと、しばし牛丼をかつこんだ。「そんなんでは次の見合いでも失敗するぞ」といつてやると、「朝倉さんには言われたくありません」と言い返して来た。口の端から米粒が一つこっちへ飛んで来た。

「朝倉誠吾さん」

「・・・はい」フルネームで呼ばれ、思わず姿勢を正した。涼香は怒った顔のまま、満足そうにひとつ頷いて続けた。
 「人はいつも、大切なものを失ってから、それを自分がいかに欲していたかに気づくんです。はつきり言っただけのあなたを見ていると、背中がむずがゆくなってくるわ」

「そいつはどうも」

「わたしがかつて朝倉さんのことを諦めたのは、二階堂さんとあなたのことがわかったからです。こんなことをこの梨羽涼香に言わせておいて、それでもまだシラを切るつもりなわけ？」

涼香は本当に怒っていた。その顔を見ながら、「俺を諦めた」ってのは何だと思った。まったく気づかなかった。

自然と笑みが出た。「悪かったな」

「悪いとか良いの問題じゃないでしょう？」げんなりした顔をして肩を落とす。

「まったく世の中の男ってどうしてこう素直じゃないのかしら」

「まるでこんな場面を他にも経験したみたいじゃないか」

俺がそう言うのと、涼香は今度こそ怒り心頭に來たという感じで啖呵を切った。

「こんな場面じゃなくなたって、ふがいない男が多すぎるのよ！ 頑張っただけだよ！」

そう言い放つと、ヴィトンのショルダーをひつつかんでたくましく髪をなびかせ、吉野家から出て行ってしまった。女に怒鳴られたのは、お袋と姉貴以外、初めてだった。

龍介が女と腕を組んで歩いていたら聞いても、いまいちピンと来なかった。それが事実であったとして、だからどうしたと問われれば、俺には何も言えないのだった。そうなるべくしてなったのならそれが龍介の人生というものだし、俺には彼を所有する権利も、束縛する権利もない。

代々木公園駅から自宅へ重い脚を引きずりながら、そうして俺は自分の気持ちを落ち着かせようとしたのだが、そうすればするほどあらゆる感情を溜め込んでいた袋の綻びが拡がり、そこからぼろぼろと形にならない思いがこぼれ落ちていくのだった。

風邪をひいて寝込んでいた夜、龍介の瞳を一瞬横切った何かの感情を見た。

その瞬間、俺は頭の芯が沸騰したのだ。左手で龍介の右手を掴んだ。

そのあと龍介はベッドの脇に座って、俺の頭を抱き寄せたのだった。

龍介の鼓動がはつきり聞こえた。それはいつもより早く、俺の髪に触れ、肩に触れて行った手が、わずかばかり震えていた。

そこまで記憶を辿った時、俺は自分のマンションのドアの前にいた。いつエレベーターに乗ったのかも覚えていなかった。

ドアを開けて家に入った。そうして後ろ手にドアを閉めた瞬間、胸が塞がるような渾沌たる嫉妬が突如沸き起こってき

た。龍介は次の日、普段よりも蒼白な顔で登庁してきて、相変わらず俺のことは目に入らない様子で他の同僚との打ち合わせに消えて行き、しばらくして自分のデスクに戻ってくると、脱いで椅子の背にかけておいた上着を肩にかけて、七係の同僚と一緒に出て行った。

俺はその背を目で追ったあと腕時計を見て、そろそろ外回りに行く時間だと思って机を後にした。倉沢は先に出て車を本庁前に回しているはずだった。

その日は一日中倉沢と行動を共にした。成果のない地どりで脚を棒にし、夜も九時を回るころ、残るのは緒もとうに切れた堪忍袋と、頭痛と、空腹だった。

本庁へ戻る車の中で、倉沢は俺に「何かあったか」と訊いて来た。

罪のないこの上司は俺を見ると、部下を見る以上の目線を寄こしておいてそれをひた隠しにしようとする。四十六歳の特捜犯捜査係管理官は恐らく自分に埋もれていた新たな性的傾向に愕然とし、己を責めている。そう考えながら、俺自身はいつたいどうなのだと思つた。思春期には女生徒に興味も持たし、大学時代には何人かと付き合いました。それはごく自然な形で始まり、いつのまにか消滅していった。誰もが通過する青臭い人生の一ページに過ぎなかったが、若い自分は色恋に淡白なかと悩んだこともあつた。今の俺は、それらの関係において俺自身の心が、愛を受け入れそれを与えることを、決してしなかつたのだと気づいていた。いつも気持ち中途半端に移ろい、一つの恋の形が終わっても別段悲しいと思うこともなかつた。そんな俺にはまた、他の誰かに真剣に愛されていないと感じていても、そういうものだと割り切ることは簡単だった。

龍介がいたから。

俺が答えないでいると、新宿御苑の手前で倉沢は左折し、路肩に車を寄せて止めた。

倉沢の方を見た。普段と変わらない上司の顔だった。

「きみのそんな様子を見ていられない」

「別に何も」俺はそう言うしかなかつた。相手は俺の直属の上司だ。

「二階堂と、何かあつたのか」

自分の双眸に暗い光が点るのを感じた。抑えていた何かが、腹の底で動いた。

倉沢は運転席から身を乗り出して俺を抱擁した。

ほのかに整髪料の香りがした。

俺はその間身動きもしなかつた。拒絶する気も起きなかつた。背中に回つた倉沢の手のひらが熱かつた。報われないと

いう点で、俺も倉沢も同類だと思うと、胸裏の暴露を己に許してしまったこの男に、同情すらする気になった。俺は、自分はいったいここで何をしているのだと、ぐるぐると考え続けていた。どうしたいのか判らず、頭の中が混乱していた。そのうち一切の思考が停止し、眼前は灰色に濁った幕で塞がれた。

その夜は一杯やりたい気分で、台所のカウンターに尻を乗せたままウイスキーをストレートで煽った。嫉妬に心を占領される自分を憎いと思った。俺はこの程度の人間なのかと自嘲もした。病んだ脳みそにウイスキーが沁みていった。もう何日もろくに寝ていなかったし、今日だけは泥のように眠りたいとそればかりを考えていたが、それは結局その日には叶わなかった。

玄関の鍵の回る音がしてドアが開き、顔面蒼白の龍介がふらりと入ってきたのを見た時、一瞬考えすぎて幻覚を見たのかと思った。だがその幻覚が右手に葉の台紙のようなものを握り締め、泳ぐ視線に俺を捉えて「これが何なのか調べて」と言った途端、俺はカウンターから飛び出して、現実にも目の前にふらつく龍介を慌てて支えた。

龍介の身体は異様に冷え、美しい湖水を映していた瞳が濁っていた。白目の部分は血走っていて、そんな目で俺を認めると、助けてと囁いた。

俺は龍介を抱えるようにしてソファまで運んだ。それは俺の知る龍介だった。まだ間に合うと思った。龍介を座らせたあと、あの風邪の晩に龍介が俺にしたように、毛布をひつつかんでそれでその身体を覆った。その上から俺は龍介を抱きしめた。背中へ手を回した。頬を触って温めようとした。龍介の顔を俺の胸へ押し付けると、鼻先が氷のように冷たかった。俺はサイドテーブルの上のコードレスを夢中で掴んだ。呼び出し音が一回鳴ってすぐに繋がった救命へ、大至急救急車をと叫んだ。

東大病院救命センターの廊下で、俺は医者の説明を聞いていた。

龍介の身体は薬物に対する拒絶反応を起しており、胃洗浄を施したあとに今は二十四時間体勢での解毒剤注入を開始したことで、肝機能が著しく低下し、血中アミノ酸の濃度が異様に低いことから、短期間で急激な向精神薬の服用により中毒症状を起したと考えらるること、よって解毒剤は、ジフェンヒドラミン塩酸主体であること。

「向精神薬？」

医者は俺の持つてきた薬をこちらへ返しながら言った。

「これは、クロチアゼパムという、ベンゾジアゼピンを含む睡眠導入剤です。ただ、この台紙にある通りの容量では、例えば十錠を一気に嚥下したとしても、これだけの中毒症状が起るとは考えられません」

そういうと、大学時代俺たちより三期下だった彼は、今ではすっかり医者の方針を見させて俺の目を見た。

「成分分析をしてみます。恐らくこれは純正のベンゾジアゼピンです。それを二階堂さんは知らずに服用していた」

そうして言葉を切つて、瞬きをした。少し笑顔になった。

「毒性が増加する前によかったですよ。五日もすれば良くなります」

身体中から力が抜けた。

強張っていた背中の筋肉が緩み、驚愕で閉ざされていた全ての血管の弁が開き血流が再開された。手足に熱が戻ってきた。すると今度はこの薬を龍介に渡した誰かに対する憎悪に火が点き、それは一瞬間光を放ったあと、強烈な怒りとなって爆発した。

俺の一報を受け、店における全ての業務を放り出して武郎が駆けつけてきた。

点滴の管をつけられ、今は安らかな寝息を立てて病室のベッドで眠る龍介を見ると、「俺のせいだ」とつぶやいて椅子に座り込んだ。

「どういふことだ」

「俺が二階堂に心療内科を紹介したんだ」

「龍介はそんなに悩んでいたのか」胸の奥が苦しかった。

「最近眠れないと言っていた」

武郎は龍介の足元辺りを凝視しながら言った。

「だいぶ前、お前が風邪を引いていた晩、二階堂が十一時ごろふらりとやって来たんだ。一目見て、泣いていたとわかった」
そのころ俺も、クッションに顔を押し付けて泣いていたのだ。

「二階堂は、失ってしまいうくらいなら、最初から手に入れないほうがいいと言った。すぐにお前のことを言っているのだと思ったよ」

ああ、やはり俺たちは同じことを、同じ時間に、同じように考えるのだ。

胸が張り裂けそうになると同時に、恍惚が全身を貫いた。

「お前たちは、何をそんなに恐れているんだ」

梨羽涼香とはまた違った方法で、そうして武郎は俺を責めた。

心療内科医の名前とクリニックの住所を告げて、武郎は肩を落としたまま病室を出て行った。

少しずつ龍介の顔に生気が戻っていくのを、俺は個室のベッドの横に座りこんで見つめていた。

龍介の身に起こるどんな些細な変化をも見逃すまいと思つた。顔にうつすらと汗をかいていたので、ハンカチでそれを拭いてやった。規則的で静かな呼吸に合わせて、薄いタオルケットで覆われた胸郭が穏やかに上下していた。夜中の二時に巡回の看護師が来て、付き添いの方の同室はこの時間にご遠慮願っているのですがと控えめに言ってきたが、俺が無言のままそこを動かないのを見ると、引き戸をそっと閉めて行ってしまった。

閉じられた目を縁取る長いまつげが、細かく振動してまた止まった。俺の手の下で、龍介の細く長い指がたまに動いた。俺はそれを自分の頬に近づけ、何度も唇を付けた。

枕元の淡い電灯に照らされた龍介の横顔に見惚れた。ほんの僅かに開いた美しい唇にキスしたいと思つた。緩やかな曲

線を描く首筋に、顔を埋めたかった。涙で龍介が霞んで見えた。

俺は、龍介を愛していると自覚した。

神崎律子は取り調べに對し、自分の処方に誤りがなかったこと、クロチアゼパム処方時に容量を確認したが、その容量が台紙の記述と一致しないことは自分の責任ではなく、高い依存性と、アルコールの併用により死に至る危険のある純正のベンゾジアゼピンを規定量以上患者に処方した事実はないなどと供述した。なおかつ患者を個人的な理由で連れ出した記憶はないと、梨羽涼香が目撃した銀座でのことを否定した。

倉沢が神崎律子の取調べをしている間、俺は後ろの壁にもたれて腕を組み、その女医の爬虫類のような顔を凝視していた。白目がちの眼を卑屈に動かし、薄く醜悪に引つ張られた唇の間から覗くトカゲの舌のような艶かしい血の色を見た。

この女が西日の当たるクリニックの一室で、排他的な美しさを誇る龍介に偏執し、催眠にかけ、操ろうとしているのが見えた。

神崎律子が俺を見て、不気味な笑みを漏らした。

龍介は五日間の入院の後、三日の自宅安静と言われて退院してきた。

俺は龍介を迎えに行き、何の迷いもなく代々木のマンションへ連れて帰った。

ソファに身を沈めたあと、磁器のように白い肌で龍介は半ば放心したように俺を見遣った。緩やかな昏睡状態が続く間「ずっと誠吾の夢を見ていた」と微笑み、「ごめん」と俯いた。

俺は龍介を抱き寄せ、その首筋に顔を埋めた。龍介の口から、震えるような吐息が漏れた。両腕を回して龍介の背を抱き「おかえり」と囁いた。龍介の右手が戸惑いながら俺の後頭部にふわりと触れ、同時に温かい手のひらを首の裏に感じた。長い指が髪の間をゆっくりとうごめいて、俺の背に回した腕に僅かに力が込もった。お互いに一言も発さず、俺たちはたっぷり五分はそうしていて、この三週間のすれ違いを埋めるために、ひそやかに互いを貪った。臆病で、不器用な男

たちの、それは精一杯の抱擁だった。

やがて俺は龍介を離れた。立ち上がって台所へ向かい、「何食いたい？」と訊いた。

龍介は「うどん」と言い、「てんぷらは抜きでいいよ」と笑った。

その晩俺たちは、龍介の親父さんの葬式の晩のように、布団を二つ並べて寝た。

高校のころのバカ話や、大学、警察大学校時代のこと、龍介の司法修習時代の話、出会った人間のこと、かつての教授や上司たちの悪口、読んだ本のこと、そんな他愛のない話を、まるで何年も逢ってなかった恋人同士のように語り合って、笑って、無言になって、また話し出したりした。

龍介は、よく笑った。笑うたびに形のよい白い歯がこぼれ、均整の取れた弾力のある唇が美しい三日月を描いた。普段口数の極端に少ない俺が話し出すと、それが不思議で仕方ないと言っては笑い、俺が梨羽涼香に啖呵を切られたくだりを語って聞かせると、腹をよじって大笑いするのだった。笑いすぎて切れ長の目じりに涙が溜まり、俺がそれを指で拭ってやったりした。そうして二時間近く笑い倒した後、龍介は電池が切れたように深い眠りに就いた。子供のように手足を投げ出して安らかに眠る龍介を見て、俺は幸せだと思った。